おわりに　～これからの FD 活動に向けて～

FD 委員会副委員長　巻本彰一

本学は，今年度，学部については授業アンケート，大学院については代表者に対して面接形式で授業アンケートをとった。教員の FD 活動への意識高揚のために，授業アンケートの好評者を講師として「私の授業の工夫について」というテーマでお話をお願いした。また教員が FD 活動にどのような意識を持っているかを，授業アンケートについての意識調査で行った。

上記のことは，おのおの本学の中期計画や中期目標に沿って進んでいることだが，FD 活動というのは，学生（受講生）が授業を評価するためにアンケートをとる作業をいうのではなく，アンケートは一つの方法であり，そこからよりよい授業が行われることに結びつかないと，「評価づかれ」だけが残る結果となるだろう。

アンケートに対する教員の意識調査からは興味深い結果が得られた。その調査からは，回答した半数以上の教員が，授業アンケートは授業改善に役立つと考え，結果を授業実施の参考にしていることが伺える。またアンケート結果を何かの形で学生（受講生）にフィードバックすることが必要と考え，学内の FD 研修会にも参加をし，授業の好評者の授業改善の工夫は自分の授業改善に役立つと考えている。回答した教員の多くは FD 活動に関心が高いといえるが，一方，それらの教員集団をもってしても，FD 研修会への参加を「教員の職務」とすることには多くの教員が反対をしていることが明らかになった。即ち，授業改善への心がけは「義務」ではなく，「使命」というよりは「楽しみ」ということになるようだ。新しく発見された知見を加え，複数の領域を統括し授業の内容を改善して行く。範囲やレベルは，初等・中等教育のように指導要領で縛られることはない。このような楽しみを義務という制約をつけて奪うな，ということであろう。今後の FD 活動も自己を啓蒙するという路線上にあるのが，「教育」を掲げる大学からはふさわしいように思われる。そのためには，教育そのものを日常的に話題にできる環境が必要である。学内の授業アンケート好評者における FD 研修会はそれに向けた試みの一つである。また，各自の教育活動を再考する時間的なゆとりと，各人が行ってきた工夫等をデータベース化し，組織的にバックアップする機構が必要であろう。

ところで，授業アンケートはその授業に対する受講生からの貴重な情報が入っているが，一部の心ない学生の自由記述等によって，貴重な情報を不透明にしているという問題点がある。これは「評価づかれ」の一因にもなっていて，アンケート自体を否定する意見に，この玉石混合問題は多く見いだされている。これに対する方策は重要である。例えば，授業をほとんど出席せず，予習・復習もしていない，それで授業が難しい云々されても，それは授業内容や方法に起因する問題ではない。一つの方法として，出席率で意見のフィルターをかけることも必要と思われる。学生証の中の IC チップで個々の授業の出席がとれる時代はすぐに来るであろう。正確な情報が抽出できるようになれば，これは授業アンケート公開の流れにもなっていくものと思われる。

FD 活動を手掌している FD 委員会は，教授会構成員の互選で選ばれ 2 年任期である。しかし，FD 義務化の流れの中でこの方法はそろそろ限界ではないかと思われる。小さな単科大学では，高等教育センターを持つことは難しいが，せめて何人かの FD 活動を専任とするスタッフが必要な時期に来ていると思われる。